名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇　第１巻　第１号　pp. 47-50

アメリカIndiana University研修記

中　野　貴　博

私は，2010年9月から2011年8月までの約1年間，アメリカのIndiana University Bloomington校へと在外研修に行かせていただきました。本学の研修制度に採用いただき，このような機会をいただいたことに深く感謝しております。

Indiana Universityはアメリカの中東部に位置するインディアナ州の州立大学であり，州内に8つのキャンパスがあります。中でも規模が大きいのは，私がお世話になったBloomington校であり40,000名近い学生がいます。州都のインディアナポリスにも，医学部を中心とした校舎がありますが，こちらは私立のPurdue Universityとの共同利用になっています。Indiana Universityは全米で最古の州立大学で，いくつもの学部が全米の優れた地位にある全米有数の州立大学です。

写真１　Indiana University Bloomington の正面ゲート

特に，School of Jacobsと呼ばれる音楽学部（芸術系も含む）はRochesterやJulliardと並ぶ地位にあり，日本人の留学生も多く来ていました。日本人のProfessorもいるなど，音楽を専門とする日本人には憧れの場所のようです。おかげで，学内では年中を通して音楽系のイベントが開催されていました。学生の演奏会はもちろん，世界的な音楽家であるProfessorの演奏会なども開かれており，多くが激安あるいは無料なため，何度も聞きに行ってしまいました。中でも，学部の教授でもあるFederico Agostini氏のバイオリンは素晴らしかったです。Agostini氏はイ・ムジチ合奏団のコンサートマスターを務めた世界的な音楽家ですが，実は奥さんが名古屋出身の日本の方のため，我々も親しくさせていただきました。正月には子どもと一緒に餅つきをしたり，今思えば，すごいこと？　だったのかもしれません。また，Summer Music Festivalの一貫で開催されたオーケストラのゲストで出演した，アカデミー賞受賞者でBloomington出身のJoshua Bell氏の演奏は身震いするほどの素晴らしいものでした。この他にもIndiana Universityには，SPEAと呼ばれる環境政策大学院，Kellyと呼ばれる経営大学院，そして法科大学院などがあり，多くの日本人も留学に来ていました。しかし，近年は日本人の留学生は激減しており，日本人会

名古屋学院大学スポーツ健康学部

のような場所以外では珍しがられることも少なくありませんでした。このように数ある学部・大学院の中で，私が，お世話になった所はSchool of HPER（Health, Physical Education, and Recreation）と呼ばれる学部および大学院でした。名前の通り日本で言えば体育学部や健康科学部あるいはスポーツ健康学部に相当します。

写真 2　HPER (Health, Physical Education, and Recreation) の校舎

私が，この場所を選んだのには，二つの大きな理由がありました。一つは，以前にこの学部のDean（学部長）をされていたDr. David Gallahueの存在です。Dr. Gallahueは，日本でも広く名の知れた，子どもの動作発達研究の権威です。どちらかというと理論構築をすることが主であり，氏の著書（Understanding Motor Development: Infants, Children, Adolescents, Adults）は，世界で最も売れている子どもの運動発達に関する書物とのことです。残念ながら氏は既に退官してしまっており，直接お世話になることはできませんでしたが，事前に現地を訪問した際に一度だけお会いすることが出来ました。そして，同じ環境で学ばせていただくことが出来たことを光栄に思います。もう一つの理由は，私の日本での共同研究者の先生が過去にIndiana Universityでお世話になっていたことです。私は，事前から家族連れで研修先に滞在するつもりでおりました。小さな子どもと一緒に行くため，どうしても現地の情報を多く仕入れていく必要がありました。だから，事前に現地を訪れ，様々な情報を教えていただける環境が私には必要でした。結果的に，これらの条件を満たすことができ，充実した1年間を過ごすことができました。

ここからは，私が1年間で体験したことを公私あわせて少し紹介させていただきたいと思います。始めに研究面ですが，理想を言えば現地で実際にデータを取って研究を進めることが出来ればよかったです。しかしながら，アメリカは日本以上に倫理面の基準が厳しく，特に人を相手にデータを取る際にはしっかりとした倫理審査が求められます。違反すれば自分だけではなく，学部全体の研究がストップされるため，滅多なことはできません。研究計画の作成，フィールドの確保，倫理審査の通過，それからデータ収集となると，とても1年では時間が足りませんでした。そこで，日本で収集した多くのデータを用いて，分析や文献研究を中心に進めることにしました。HPERに同時期に所属していた私と同じ立場（Visiting Scholar）の各国の先生は，いずれも研究室などは用意されず，自宅や図書館を仕事場としていたようです。しかし，私はなんとか交渉を進めて，12月の初旬からは，校舎の空き部屋の一角をオフィスとして使わせてもらうことが出来ました。そのおかげで日中は自分の研究に集中することができました。中でも，アメリカの大学の図書館情報システムは大変に優れており，ほとんどの研究論文を電子データで手に入れることができ，大変にありがたかったです。利用させていただいたオフィススペースを管理していたDr. Stagerおよび私の受け入れ教官であり，学部のDean

でもあったDr. Kocejaには環境面でも大変お世話になり，順調に論文の執筆活動ができたことを深く感謝しております。研修期間中の後半には，デンバーで開催されたACSM（American College of Sports Medicine）においても学会発表をすることができました。最終的に1度の国際学会発表と和文，英文あわせて4つの筆頭研究論文を書くことが出来ました。主に，執筆活動を中心に行ったため，研究室の学生や受け入れの教官とコミュニケーションをするような機会は多くありませんでしたが，同じ空間で研究活動ができたことは大変に良い経験となりました。

現地では，研究活動の他にも幾つかの専門の授業を聴講させていただきました。私が聴講した授業は，主に，統計解析の授業とヘルスプロモーション（健康教育系）の授業でした。最先端の研究理論というよりは，アメリカにおける同分野の考え方や流行のようなものを聞くことができたように思います。語学力の問題から全てを理解することが出来なかったのは少し残念ですが，特に，健康教育やヘルスプロモーションにおいてアメリカで何が重んじられているのかを聞くことが出来たのは貴重な経験でした。ヘルスプロモーションの授業をされたタイ人のProfessorの方には，授業終了後に他の学生と一緒に自宅の食事会に招いていただき，家族と一緒に参加させてもらいました。大変に親切にしていただき深く感謝しております。

アメリカ滞在中は，これ以外にも様々な場所に旅行に行ったり，息子を連れて多くのスポーツイベントを観に行ったりしました。特にアメリカの大学スポーツはプロ顔負けの盛り上がりであり，その迫力には驚かされるばかりでした。選手達は試合に出るために一定水準以上の学業成績が求められるため，普段は学業もしっかりと行っているようでした。しかし，彼らは大学にとっては特別な存在であり，例えばバスケットボール部などに所属して活動できるのは10人余りとのことでした。監督やコーチも専業であり，Professorとの役割の違いは明確でした。そして，一番私が感心したのは競技スポーツ以外の学生レクリエーション施設の充実とその活動の多さです。前述の音楽関係の活動もそうですが，学生がレクリエーションとしてスポーツを実施するための豊富な施設と機会が用意されていました。専任のスタッフも多くいました。そして，そのほとんどが周辺住民にもオープンにされており，大学が地域で果たすべく公共的な役割をしっかりと果たしていると感じました。そのためか，周辺の住民の中に自分たちの

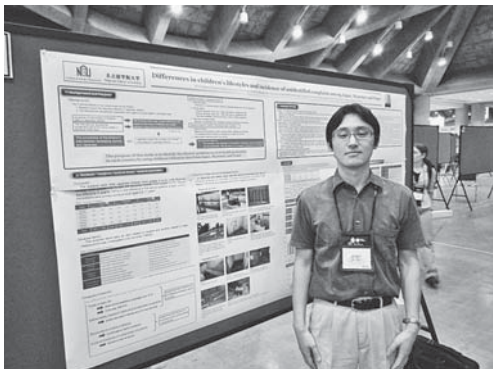

写真 3　学会発表の様子

写真 4　大学スポーツ観戦時の様子

大学という意識が強く感じられました。大学のスポーツイベントには学生以外の人が多く応援にきているし，高齢のおじいちゃんおばあちゃんであっても，大学のTシャツやトレーナーなどを誇らしげに普段から愛用していました。日本では余り見られない光景で，とても良いものだと感じました。本学なども，地域に存在する大学として，このような公共的な役割を充実させていくことが，重要な生き残りの道であると感じました。

最後に，改めてこのような貴重な機会を与えていただいた名古屋学院大学，特に人間健康学部，スポーツ健康学部の先生方そして，故村瀬豊スポーツ健康学部長に深く感謝の意を表したいと思います。